**東洋古典学シケプリ**

文責　葛西

〇．儒学的見地

　古来から中国の文化人の思想の中核となった儒学（儒教）の怪異に対するスタンスは「否定」か「無視」か。瑞祥や奇形動物は例外的に正史（公的史書）に記録された。

　孔子も次のような立場を取った。「子不語怪力乱神」。即ち怪異や並外れた大力、儒的倫理に反した行い、幽霊譚（霊魂の実在についてなどか）について、君子は語らないとした。孔子のこの立場を、魏の時代に編まれた注釈書、何晏集解では「他人の教育に無益だから、もしくはそうしたことを言うことが耐えられないからだ」としている。

一．中国怪異文学

　先程の繰り返しになるが、全ての怪異を古代中国の知識人が排斥したわけではない。

　正史にも怪異が記載されることがあった。すなわちそれは、国家が存在を認めた怪異だった。例えば災害（地震、火事など）と怪異（龍、奇形動物など）を記録する「五行史」は『漢書』、『宋書』や『晋書』以降のすべての正史に設けられた。また、瑞祥を記録する部立てとして『宋書』の「符瑞志」、『魏書』の「霊徴史」がある。その他、古代の地理書『山海経（せんがいきょう）』にも様々な奇獣や神の記述がある。

　公式ではない書物には多く怪異が記された。時代ごとにそれらを整理する。

　まずは魏晋南北朝時代の「志怪」。これこれこういう怪があったという形式でつづられる。有名な作品として、東晋の干宝が著した『捜神記』、著者を東晋の陶淵明に仮託する『捜神後記』がある。

　唐になると、虚構性を意識した長編の「伝奇小説」が多く著される。例としては、沈既済の『任氏伝』や『枕中記』がある。また、この頃から段成式の『酉陽雑俎』などの「筆記」というエッセイのような形態も発生し、その中に怪異譚が含まれることもあった。

　宋代は、洪邁の『夷堅志』が怪異譚を三人称視点からまとめた書である。講義で取り上げた蘇軾は『東坡志林』などの筆記で自らの怪異見聞を記した。また文献資料の編纂である類書も行われ、『太平広記』はその中で怪異譚を多く収録したものである。

　明に入ると、小説の口語化がおこる。その中で『西遊記』や『封神演技』などの神仙、妖怪をメインキャラクターにした小説も書かれた。先の『太平広記』の刊行や『捜神記』などの六朝の志怪の再編集も行われ、末期にはこれらへの読書熱が高まった。

　清朝では蒲松齢が『聊斎志異』を著したことがきっかけで志怪小説が再び流行した。『聊斎志異』以外には袁牧の『子不語』、紀昀の『閲微草堂筆記』などがある。

二．蘇軾

　講義で扱った蘇軾について簡単にまとめる。

　蘇軾は父の蘇洵、弟の蘇轍と並び、唐宋八大家の一人に名を連ねる文学者である。詩以外にも、詞や書画でも己の才能を発揮した。詞では従来の男女間の情を題材とせず、自然や憂世などを題材とし、自然派の創始者とされる。

　蘇軾は景祐三年(一〇三六年)、眉山県(現四川省)の生まれ。二一歳で進士に挙げられ、翌年乙科に合格。二六歳のとき、不定期に行われる制科という登用試験に応じ、三等(実質最高位)に合格。ちなみに弟の蘇轍も四等に合格した。

官吏に登用されてから文筆活動を行い、登用時の皇帝仁宗と次の英宗の頃は順調にキャリアアップをしていった。しかしその次の皇帝、神宗が王安石を抜擢し、新法による改革を推進すると、蘇軾は保守派の旧法党の一員となり、改革派の新法等との政争に巻き込まれる。元豊二年(一〇七九年)、詩が朝廷を誹謗していると糾弾され、投獄。恩赦を得て牢から出るも、黄州(現湖北省)に流される。ここでの生活の中で講義で取り上げられた『子姑神記』、『天篆記』、『延年術』、『朱元経爐薬』を著す。

元豊八年(一〇八五年)に登州の知事に任ぜられるも、着任数日にして都に呼ばれる。神宗が崩じ、哲宗の祖母で旧法派の宣仁皇太后が実権を握ったためであった。この一件を基に『海市』を書く。名誉回復の後は知事を歴任し、朝廷内の地位も上がっていった。

しかし哲宗が自ら政治を行うようになると、再び新法党が力を増し、紹聖元年(一〇九四年)に恵州(現広東省)に流される。この地で『李氏子再生説冥間事』を著す。

元符三年(一一〇〇年)に哲宗が崩じて徽宗が即位すると、両党の融和が図られ、蘇軾もまた名誉を回復した。しかし翌年、旅行中に病を得て常州(現江蘇省)にて没す。六六歳。

三．中国の異界

　『海市』は蜃気楼について書かれた詩である。登州の蜃気楼は有名であったらしく、『夢渓筆談』にも「宮殿や塀、人や車などのさまがはっきりと見える」とある。詩に登場する「海神広徳王」は宋の仁宗に封じられた道教の神。当時は宮中でも盛んに道教を信仰していた。『海市』には韓愈についての言及もある(『海市』[四]参照)。これは韓愈が詩の中で、「秋雨の頃に名勝の五嶽に来たが、私の心根が正しかったため名山を見ることが叶った」と書いていることに由来する。

　さて、『海市』では海の上に蜃気楼の山が現れる。中国では古代から海の彼方に神仙の住まう蓬莱山、方丈山、瀛州(えいしゅう)山の三神山があるとされた。司馬遷の『史記』にも三神山の記述があり、「渤海の中に浮かび、船で上陸しようとすると風が吹いて船を押し戻す。遠くからこれをみると雲のようで、近づくと水中にいるように見える」という。三神山には不老不死の薬があるとされ、古代の王はこぞってこれを求めた。始皇帝も不老不死を欲して道士に金を出したり、船を出させたり、三神山に対しているという会稽山に登ったりしたという。後にこの道士は徐福という名で、日本に到来して技術を伝えたという伝承が生まれた。

　蘇軾は三神山の存在を『麗山三絶句』の中で否定している。

四．中国の冥界

　中国の冥界として有名なものが泰山(太山、岱宗山とも)である。もともと民間信仰で伝えられていたもので、泰山府君を主とする。六朝志怪の『列異伝』には「天帝の外祖父」と書かれ、使いをした小役人が(天帝にであるが)亡妻を蘇らせてもらったという話がある。天の神より偉い存在とされていた訳である。特徴としては寿命を司り、現世の役人組織と同じ形態であることが挙げられる。

　後に仏教や道教が発生すると、泰山信仰はその中に取り入れられた。

　仏教では泰山は地獄と融合し、泰山府君は地獄の王、死者の生前の罪の審判者とされた。唐代にはインドの原典の無い偽経『閻羅王授記経』が編まれ、十王思想がおこった。すなわち、死者は初七日から三回忌までの十の法要の間、十王によって十回の裁きを下され、冥土の責めや転生が定まるという考えのことである。『夷堅志』では動物を放すことで功徳を積んだ男が、十王によって寿命を延ばされて蘇生する話がある。『牡丹灯籠』の元ネタである『牡丹亭還魂記』にも十王の部下の判官が登場する。しかし十王は、そういった文章よりも民間信仰の語り物である宝巻に多く登場する。

　道教の地獄は羅鄷(鄷都)と呼ばれ、北方にある山とされ、その下に洞窟がある。山上と洞窟にそれぞれ六つの宮殿があり、それが六天鬼神(仏教でいう六道全ての幽霊か？もしくは全世界の死者を扱う神か？)の宮殿だと『抱朴子』にある。

五．中国の神

『子姑神記』では正妻に厠で殺された妾が神になったとあり、『天篆記』にも長陵で難産で死んだ女性が神として祀られたという『史記』の記事の引用がある。中国では人が死後神としてたびたび祀られるが、日本においても古くは菅原道真公や崇徳天皇、最近では東郷平八郎などが祀られているため、そう驚くようなことでもないかもしれない。

そもそも中国も日本と似て儒教、仏教、道教の進行が混淆しており、そこにさらに民間信仰が入り込んで神の数がかなり多い。蘇軾が取り上げた紫姑神も様々な来歴を持つものが語られている。一般には一月一五日に祀り、多くに当てはまる特徴として「厠で死んでいる」ことが挙げられる。『夷堅志』では自殺した餅屋の娘、愛人に殺された娼妓、唐の呂少霞という人などが紫姑神として取り上げられている。知識人の家では紫姑神の神降ろしを行い、火箸で灰に文字を書いて占いをする扶鸞（扶乩）が行われるようになった。

死後、人が神になることも多く語られている。『捜神記』には蒋子文という人が死後に土地神となり、意に反すると祟りを起こしたことが記されている。三国志の曹操、劉備、孔明なども神として祀られており、中でも関羽は商売神として根強い人気を得ている。ちなみに関羽も扶鸞を行っていたようで、『関聖帝君覚世真経』の書があるという。

六．不老長生

　三でも言及したように、不老不死への憧れは強く、皇帝は三神山の薬を求めたほか、道士に長生の術を請うた。不老長生の術は、体内の陰陽のバランスや気の巡りを整えることが重視され、例として、煉丹術による薬の服用、穀物断ち、柔軟体操である導引、呼吸の工夫、男女の交わりの工夫というものがあった。

煉丹術は中でも注目された。それは漢の頃の『列仙伝』という仙人紳士録ともいうべき書物に、薬を服用して仙人となった例が多く載っているためである。道教のテキストの1つ『抱朴子』にも煉丹術の詳細な解説が載っている。伝奇小説『杜子春伝』にも煉丹術のことが描かれている。煉丹術の隆盛は本草学(薬草についての学問)の発達も引き起こした。

　蘇軾は、『延年術』や『朱元経爐薬』において道術による不老長生を否定しているが、健康術としてはある程度評価していたようで、『答秦太虚書』では「速やかに道書や方士の言葉を参考に、自らしっかりと体を鍛錬すべき」と書いてある。